Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-29

ウォルター・スコットの日記（1）

米本，弘一(訳)

(Citation)
国際文化学研究 ： 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要,47:89*-116*

(Issue Date)
2016-12-25

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041030

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041030

ウォルター・スコットの日記*（1）

米本弘一・訳

1825年11月　エディンバラ

20日（日）　私は毎日きちんと日記をつけてこなかったのを後悔している。これまで起こった興味深いことをほとんど忘れてしまったので、この決意を実行に移さなかったことで、家族や世間の人の好奇心をそそる情報を与える機会を逸してしまった。

最近バイロンの手記を見る機会があった。彼は毎日きちんと日記をつけようなどと気負うことなく、ただ心に残った出来事だけを書き留めておくという正しいやり方を思い付いたようだ。私もこのやり方を試してみようと思った。すると、何と、女性が使うサイン帳のような、鍵の掛かる立派な代物が手元にあるではないか。注記[1]：ジョン・ロックハートとアンと私は、サイン帳の公開を禁止する会を作ることになるだろう。[2]　極めて厄介な物乞いだ――あなたの自筆です――詩もあります――この雑文集の名誉を汚す、のたくった字で書かれたソネットや書き散らかされた戯れ言の中に、散文もあります――お世辞として言われる、こういった煩わしい言葉を飲み込むことができる丈夫な胃が必要だ。

今年の夏にアイルランドに行って、とても楽しい旅をした。ウォルターとジェインに残してきた100ポンドも含めて、500ポンド掛かった。[3]　大勢で豪勢な旅をしたからだ。

私たちがアイルランド人について考えていることは誇張ではない。彼らの貧しさは誇張ではない――人間として考えられる限り惨めな生活をしている――彼らが住んでいる家は、スコットランドでは豚小屋にも使わないようなものだ――ぼろぼろの服は古着屋から出たゴミのようで、様々なみすぼらしいものをとても器用に身にまとっているので、何かゆがんだ趣味が、こういった多くの切れ端を寄せ集めたのだと思うだろう。どこかの結び目か紐がほどけて、エデ

ンの園の頃の生まれたままの姿が目の前に現れるのではないかと、いつもびくびくしなければならない。食べ物はと言うと、ジャガイモしかなく、それもほんの少ししか食べられない。それでも、男はでっぷりと太って健康そうで、女は丸ぽちゃで血色が良さそうに見える。

日曜日なので、ウィリアム・クラークとチャールズ・カークパトリック・シャープと食事をした。ウィリアム・クラークはかの有名なる『海軍用兵術』の著者の次男で、大学の時から親しくしており、どんな好ましい話題についても、あれほど才気煥発で物知りな男に会ったことはないように思う。[4] 若い頃はエディンバラの人間らしく誰彼構わず議論をふっかけたものだが、いろんな人と付き合っているうちにすっかり人柄も丸くなり、相手に合わせようとするようになった。それでも、万事いい加減に事が進められるロンドンの社交界では、筋道を立てて優雅に話を進めるだけでなく、いつ話をやめたら良いか分かっている、最高に話し上手な人間の座にクラークを就かせたくないという気持ちが強い。しかし、私としては、スコットランド人の話し方の方が好きだ。話に内容もあるし、情報も多いし、とりわけ熱意が感じられるからだ。世間ではクラークは有名な人だったという評判しか残らないのではないかと心配している。彼は生まれつき怠け者なので、立派な仕事を成し遂げることはないだろう。

チャールズ・カークパトリック・シャープもまた驚くべき男だ。[5] 彼は聖職者としての教育を受けたが、聖職に就くことはなかった。思うに、生まれつき女のような声をしており、祈りの言葉を唱えるには耳障りだったからだろう。何か家庭内でもめごとがあって、調停による裁定によって兄からわずかばかりの年金を支払われることになったが、収入は十分ではない。とても頭が良く、カークトンらの著書が証明しているように、昔の事を研究する才能がある。[6] 彼は考えられる限り奇抜で滑稽な絵を描く――ホガースと、聖アントニウスの誘惑のようなグロテスクな題材を描いた外国の巨匠の作風を合わせたような絵だ。詩人としてはあまり才能が感じられない。指ではあんなに上手に描けるのに、言葉では分かりやすくしっかりとした形で書くことができないのは不思議なことだ。絵描きになっていたら大いに稼ぐことができただろう。しかし、骨董趣味があり、したがって、高価なガラクタが好きだが、貴族

的な考えの持ち主なので、収入を得るために絵を描くつもりはないのだ。彼は優れた系図学者で、ダグラスなどが書いた本で家系に関する数多くの発見をしているが、わが国の貴族たちはできればそういった本を発売禁止にしたいと思うだろう。[7] 不思議なことに、人は何世紀も前のスキャンダルを知りたがるものだ。チャールズは社交界の花形となるために何度も新たにそういったスキャンダルを好んで取り上げているわけではないが、今人々が口にしている噂をよく知っており、いかにも楽しそうにそういった話をするので、誰でも感心して聞き入ってしまうのだ。あの独特の声も全体の効果を高めるのに少なからず役立っている。思うにチャールズは、風変わりなところや趣味や諷刺、高尚で貴族的な感情の点で、ホレス・ウォルポールに似ている――人柄だけでなく、おそらく全体的に似ている。『オトラント城』の著者については、ミス・ホーキンズによる説明を参照のこと。[8]

二人の他に食事を共にしたのは、親しみをこめてマクドナルドのお嬢ちゃんと呼ばれている、陽気で気さくな友人だけだった[9]――ご婦人方の助けを借りてシャンパンを一本とクラレットを二本空けた。私の見るところでは、この二人の優れた目利きは、女王メアリーの本当に確かなモデルはいないということに関して、完全に意見が一致しているわけではないが、とても近い考え方をしている。それでは、なぜ私たちは彼女の顔立ちがはっきりと分かっているのだろうか。数多くの作品の元になったすべてのモデルは、どうなるのだろうか。この点についても、確かにメアリーは、生涯の他の事柄と同じく、不運だったに違いない。

21日（月） 私は日記に心奪われている。この熱意が続いてくれることだけを願っている。またアイルランドのことを書こう――前にも書いたように、アイルランド人の貧しさは決して誇張ではない。彼らの機知も――彼らの愛想の良さも――彼らの気まぐれで馬鹿げた行動も――彼らの勇敢さも誇張ではない。

機知。ある時、料金が6ペンスなのに1シリング与えた――「パット、[10] 6ペンス借りがあるのを覚えておけ」。「借りを返すまで、あなた様が生きておられますように」。この言葉には機知だけでなく礼儀正しさもあった。パット

が着ている服はその金で買うには高い買い物だっただろう。

愛想の良さ。アイルランド人の家ではいつも親切にもてなされる――バターミルク――ジャガイモ――客人を座らせて、煙がかからないようにするために、椅子が出て来たり、石がゴロゴロ転がって出て来たりする。よそではいつも物乞いをしている者たちが、家では気前よく客をもてなしたがっているようだ。彼らは生まれつき陽気で愉快な気質なのだ。スコットランド人は支払期日のことばかり考えており、その心配がなければ、来世での地獄のことを考えている。イングランドの人間は、マフィンがうまく焼けなかったからといって、現世をちょっとした地獄にする。それに対して、パットはいつも楽しく滑稽なことばかり考えている。確かに彼らは激しやすく、ちょっとした疑いの気持ちからあなたを殺してしまうこともある。次の日には、全くの間違いで、殺す相手はあなたではなかったということに気付くのだが。

愚かさ。クレアモント卿の屋敷の近くの道を広げる工事をしている所を通りかかった。何台かの荷馬車が一カ所に集められていたので、岩を爆破しようとしており、間もなく発破が仕掛けられるのだと思って、私たちも馬車を止めた。2 分くらい待った時、一人の男が何か大声で叫び、私たちの馬車が惑星となり、他の荷馬車が衛星のように周りを取り囲んで、すぐに走り出した。すると、アイルランド人たちが大声で叫んで、馬を全速力で走らせた。それが何を意味しているのか分からず、私はただ、彼らは私たちが通り過ぎるまで発破に点火するのを待っており、私たちはできるだけ彼らを待たせないように急いで走っているのだと思っていた。そうではなかったのだ。急いだために、爆発が起こった時、私たちは岩から 10 ヤードも離れていない所に来ていた。土や砂利が馬車に降り注いだ。御者がもう少し近くまで走らせていたら（彼が馬をけしかけて鞭打つのを惜しんだせいではないが）、爆発に巻き込まれて、もっとひどい目に遭っていただろう。御者の説明では、地雷が爆発するまで時間が掛かるので、通り抜ける時間があるだろうと現場監督に言われたとのことだ。だから、私たちは危険が迫るまで待っていたことになる。付け加えるべきことは、2、3 人の男が馬車の後ろに回って、どうやって私たちがそこを通ったのか確かめたということだけだ。

今朝、私が社長をしている石油ガス会社の役員会に行った。[11] この会社のおかげで、エディンバラの活動的で仕事好きな、金儲けの上手な人たちと付き合うようになって、楽しく過ごしてきた。ちなみに、彼らのほとんどがホイッグで、彼らの意見や所業は私を楽しませてくれる。市場では株価がかなり下がっており、額面超過額は、以前は 5 ポンドだったのが、35 シリングになっている。それでも、きっと株価は上がるだろう。ガスの灯りの利点は否定できないものであり、人々はすぐに根拠のない不安や思い違いを気にしなくなるだろう。休暇には街を離れるとするなら、20 ポンドから 25 ポンドで見事に家を照らすことができる。最後の 3 期分で 10 ポンド 10 シリングだったのが、最初の四半期だけで 8 ポンドというのは金が掛かり過ぎだ。これはどういうことか分かるだろう――最もひどく最も暗い季節は金が掛かるのだ。

サー・ロバート・ダンダスとの食事の席でメルヴィル卿夫妻に会った。[12] 幼い（職務上の）姪たちがちょっとした楽しい曲を歌ってくれた。私には音楽の心得もないし歌うこともできないので、込み入った音楽は、心地よいけれど混乱した、意味のないおしゃべりのように聞こえる。それでも、歌や素朴なメロディーは、言葉や思想と結び付いた時には特に、他の人と同じように私に感銘を与える。それでも私は、幼い子供が曲にふさわしい感情も表さないで歌っているのを聞くのは嫌いだ。ピアノや角笛のように生彩のない声には耐えられない。魂や精神に関わる芸術には、人間の生命の根源と同じように、最も鋭い解剖学者が調べても分からないところがある。どこか良くないと感じるけれど、どこが良くないのか説明することはできないのだ。サー・ジョシュアか誰か偉大な画家が大いに苦労して描いた絵を見ている[13]――「ああ、そうだ」と、彼は口ごもりながら言う――「とても上手だ――とてもよく描けている――非の打ち所がない――でも何か足りない――足りない――足りないのだ――そうだ――あれが足りないのだ」――そう言って彼は頭の上で指を鳴らすのだ。私がこれまで聞いた中では、トム・ムーアが最も美しく、小鳥がさえずるように歌っていた。スコットランドの唄を歌わせると、次に上手なのはデイヴィッド・マカロックだ。そして次に、バーンズが大いに感服して、新しい曲のために創った詩を試しに歌わせていた、ダンフリースの少年がいる。その子はアードウォールのマカロックの弟だ。

22日（火）　ムーア。[14]　今年になって（初めてと言ってもよいが）ムーアに会った。私たちが公の場で会ってから実に20年になる。彼には男らしい率直さと本当にゆったりとした態度と育ちの良さがあって、とても感じのいい男だ。詩人ぶったところや学者ぶったところは全くない。小さな――とても小柄な男だ――ルイスより小柄だと思う。[15]　外見は少し似ていると思うが、話をしてみると違っている。マシュー・ルイスは、頭はいいけれど退屈極まりないやつだからだ。その上、あいつはいつも小学生のように見えた。ダルキース・ハウスで彼の絵がみんなに回されていたのを覚えている。その絵は、ソーンダーズが描いた小さな絵だったと思うが、ルイスの体をマントで包み、手には短剣か手提げランプの付属品のようなもの（だと思う）を握らせて、刺客のように見せようとしていた。「これはマット・ルイスのようだ」と、その絵が回って来た時にヘンリー卿が言った。[16]「ああ、これは大人のようだ」。結果を想像してみろ。ルイスはヘンリー卿のすぐそばにいたのだ。さて、ムーアはルイスのようにちっぽけに見えることはない。実際に彼はルイスよりたくましい体つきをしている。確かに容貌は不細工だが、話をしたり歌ったりしている時には、とても生き生きした表情になるので、最も美しい顔立ちの人よりはるかに興味をそそる。

バイロンが仲間内の会話でも日記でも、しばしばムーアと私のことを一緒に取り上げ、同じような敬意を払って話していたのは知っている。だから私は、二人の間にどんな共通点があるのか知りたいと思った。ムーアはこれまでずっと華やかな世界で暮らしてきたが、私は田舎暮らしで、実業家や時には政治家と付き合ってきた。ムーアは学者だが私は違う。彼には音楽と美術の才能があるが、私には音楽の心得はない。彼は民主主義者だが、私は貴族だ。彼はアイルランド人で私はスコットランド人で、二人ともかなりの愛国者だということ以外にも、いろいろと違っている点は多い。それでも、互いに似ており、それがはっきりと現れている点もある。二人とも陽気な人間で、名士としての威厳を保つよりも、今起こっていることを楽しもうとする。また、二人とも広くしっかりと世間を見てきたので、自分が偉いと思い込んでいる文学者を心ひそかに軽蔑しないではいられないのだ。そういった輩は、傲慢な態度で歩き回り、ジョンソン博士がパブで出会った、「リンネルの皺を延ばすための、新型の弁が付

いたアイロンの発明者、偉大なトゥオームリ」と名乗る男をいつも思い出させるのである。[17] ムーアはまた、私と同じように冗談が好きだ。彼はバイロンの回想録のことではひどい仕打ちを受けたと思う。彼はバイロン卿の身内（遺言執行人たち）にその本の権利を譲り渡したので、人生で最も困窮していた時に、その本のために工面した2000ポンドを失ったのだ。確かに、のちになって彼らはムーアにその金を返そうと申し出たけれど、書店との間で問題を解決すべきで、かわいそうなトムの心を私利私欲と戦わせるようなことはすべきではなかった。少なくともそのように対処すべきだったと思う。いずれにせよ、誰かがバイロンの本当の伝記を書かねばならない。どうして彼らは、バイロンが自分の手記を託したトム・ムーアに、自分たちが持っている資料を提供しないのだろうか。しかし、ムーアはカム・ホブハウスがみずからバイロンの伝記を書こうとしていると思っている。[18] 彼とムーアは交渉の際に激しい言葉を取り交わし、けんかを収めるためには何か説明が必要だった。バイロンの手記をすべて破棄することでしか、遺言執行人たちが満足しなかったのは残念なことだ――でも、理由があったのだ――深夜の闇がそれを覆い隠すだろう。

トム・ムーアが近所に住んでいたら、人生はもっと楽しいものになっていただろう。二人で一緒に劇場に行った。すると、幸いにも観客たちは大喜びでムーアを迎えてくれた。私は彼らを抱きしめてやりたいと思った。これでアイルランドで受けた心からの歓待のお返しができたからだ。[19]

5月の朝には何かが起こると言うが、11月の朝の方がふさわしい［シェイクスピア『十二夜』、3幕4場］。ロンドンの金融危機がコンスタブルの代理店のハースト・ロビンソンに影響を与えている。あの本屋がつぶれたら、コンスタブルは立ち行かなくなるだろう。そのようなことになれば、ジェイムズ・バランタインと私もとても困ったことになるだろう。[20] 幸いにも、最悪の事態に備えて、少なくとも1ポンドにつき40シリング払うだけの金はある。しかし、その結果大いに困窮し、不自由を被ることになるだろう。私は1814年に痛い目に遭って、それがよい教訓になったはずだ。[21] しかし、成功し豊かになると、そんなことは忘れてしまった。でも、今は日記を書いて教訓を引き出したりするような時ではない。貧しさというのは気むずかしい顔をした料理女のような

もので、私を鞭で叩いて踏み車に登らせ、焼き串を回させるのだ。『ウッドストック』が1月25日までに出たらうまくいくだろう。それまでにはできる。[22]

サー・ジョン・シンクレアの息子が海に飛び込んで、海軍の同僚（ホープの息子）の命を救った――とても勇敢な行為だ。[23] しかし、あの大馬鹿者は私に「市民の栄冠について」の詩を書くように言ってきた。彼はアダムの『ローマ故事』からの一節を送って来て、その詩を流れるように美しく読んでやったら、海軍省も友人の命を救った若者を昇進させる気になるだろうと言うのだ。[24] おお、彼はまれに見る鉄かぶとだ――驚くべきモリオンだ。[25] どこを探しても、あのようにドングリを腹一杯詰め込んだイノシシはいないと思う［シェイクスピア『シンベリン』、2幕4場］。

押し寄せてくる妄想のために要領を得たことを書くことができなかった［シェイクスピア『マクベス』、5幕3場］。糸車はやすやすと回ろうとしないし、無理やり回すこともできない。

糸車は古くてうまく回らないし
糸巻き棒は持ちそうにない。
不機嫌な白鑞のピンを押さえるのに
何度も手を使わなければならない。

食事に招かれていると思ったので最高法院次長の家に行ったが、約束は先週の火曜日だった。本当に人と会いたい気分ではなかったので、嬉しくなって戻って来た――そして、ビーフステーキを食べた。確かに私の食欲は、量はいざ知らず、農夫のようだ。何でもほどほどに食べる私が食通として好むのは、最も質素な食べ物だからだ。一人の時はワインを飲むことは滅多にない。その代わりに少しだけウイスキーの水割りを飲む。糖尿病につながる体の衰えを心配して、近頃は量を減らしている。父は極力節制に努めていたけれど、あの病気のせいで健康を損ねたのだ。その代わりに、同じように心を静めてくれる葉巻を二本吸った――

ただ寒い冬を追い払い
一日の疲れをまぎらすために。

20年ほど前にアッシュスティールに住んでいた頃はやたらとタバコを吸っていたが、ある朝居間に降りてみると、狭い部屋だったので煙で気分が悪くなって、何年もタバコをやめていた。しかし、軽騎兵隊の将校の息子とオックスフォードの学生の義理の息子を見習って、また吸い始めた。あすにはまたやめることができるだろう――こういったことでは習慣に支配されるなどというのは笑止千万だ。

私たちはまず巨人を作り出す。そして――殺してはならぬ。[26]

23日（水） ムーアと一緒に覚え書きを比べてみて、あのバイロンの変わった性格について考えていた時にいつも主張していた点に関して、一つか二つ確証を得た。一つには、ルソーと同じように、彼はとても疑り深い性格であり、飾り気のない、全く揺るぎない態度は、良い評判を保つための確かな手段だったのだ。ウィリアム・ローズが言うには、一緒に座っていた時に、彼は無意識のうちにバイロンの足をじっと見詰めていた。[27] 忘れてはならないのは、彼の片方の足はゆがんでいるということだ。突然目を上げた時、彼はバイロンが本当に不愉快そうな表情で自分を見ているのに気付いた。しかし、ローズの顔を見て、彼が全く意識しておらず戸惑ってもいないのが分かって、表情を和らげた。のちになってマリーはこのことについてローズに、バイロン卿はこの体の欠陥に気付かれたり注目されたりしないように気を配っているのだと言って説明した。[28] もう一つの点についても、ムーアの話を聞いて、これまで抱いていた考えは確かなものとなった。つまり、バイロンは人を仲違いさせるのが好きだということだ。シェリーやハントのような、世間が注目していると思われる人物と共に『リベラル』という雑誌を創刊する計画を立てていた時に、そんなことはしないようにと忠告する手紙をムーアが書いた。[29] バイロンはそれをみんなに見せたのだ。シェリーはムーアを諌めるために、遠慮がちな、か

なり心に響く手紙を書いた。極めて疑り深く、いたずら好きだという、この二つの変わった性癖はどちらも、ある意味ではこの並外れた天才の性格の特徴となっている病気が落とす影なのだ。そのような傾向がなければ、天才は――想像力に頼るという意味での天才は――おそらく大部分が存在できないだろう。急速に回る機械の歯車は、この上ない正確さとは相容れない。ぴったりと合っていたら、すり減って勢いが失われるだろう。

もう一つバイロンが変わっているのは、人を煙に巻くのが好きだという点で、実際にそれはいたずら好きな性質と関係があるのかも知れない。彼の話をどれくらい信じたら良いのか分からない。例を挙げよう。カム・ホブハウスをむやみに誉め称える献辞を書いたのをバンクス氏が諫めると、[30] バイロンが言うには、カムが献辞を書いてくれとしつこくせがんだので、「それでは、そうしよう――君が自分で献辞を書くのなら」と言った――それで、カム・ホブハウスは本当にあの大げさな献辞を書いたとのことだ。バンクスから伝え聞いたウィル・ローズから報告を受けた私は、マリーにそのことを話した。マリーはそれに答えて、献辞は確かにバイロン卿自身が書いたものだと言って、手書きの原稿を見せてくれた。この話が仲間内に伝わるといさかいが生じるかも知れないので、ローズに手紙を書いて、この事実をバンクスに言うように伝えた。

バイロンは想像力豊かな人間はすべて退屈な話に作り話や詩的な描写を付け加えるものだと考える傾向があった。ルソーがとても興味深い話に仕立て上げたヴェニスの名高い娼婦は、実物を見れば、服の裾を引きずって歩く、薄汚い女だったと信じるに足る理由があると、バイロンはよく言っていたものだ。思うに彼は、話をかなり潤色しており、いろんな意味でほら吹きだ。とても謎めいていて陰気だと思わせたがっており、奇妙な理由をほのめかすこともあった。すべては狂気じみた強い妄想が生み出す悪ふざけだと思う。同じように彼は、決闘と称するものや、決して存在しないものや、大いに誇張されたものを人の心に詰め込んできたのだ。

コンスタブルがアヒルのようによたよたしながらやって来たが、心は雄鶏のようにしっかりしていた。彼の話を聞いて、ロンドンの書店を支援するのが良

いと確信した。彼は彼らに5000ポンドほど送金しており、さらにもっと融資するために、私たち二人が保証人になって5000ポンド借りるべきだと言っている。ジョン・バランタインとロバート・キャデルもその場にいた。[31] 彼らの知恵を借りて、最善の結果になるように望むしかない。仲間割れを起こすと恐ろしい危険を招くことは確かだ。

限りない才能の他にバイロンについて気に入っているのは、気前の良さだけでなく、心の広さと、権威的な書き方から気の抜けた文章まで、気取った文学はすべて本当に軽蔑しているという点だ。

バイロンが模範となって、詩の上院のようなものが形成されている。レヴソン・ガワー卿はとても頭の良い若者だ。ハーデンのスコット夫人の甥のポーチェスター卿もいる――彼もすてきな若者で――カーペットに寝そべって、ダンディーな詩人のように見える――それでも、

第二のバイロンが出るまでには
まだ多くの詩人が続くだろう。［シェイクスピア『シンベリン』、3幕1場］

アボッツフォードはと言うと、あらゆる種類の客があまりにもたくさん来ている。特に外国人が多くなっているが、私は彼らが嫌いだ。汚れたシャツの上にきれいなチョッキを着て、胸に飾りピンを付けているのは気にくわない。無遠慮にも見ず知らずの他人にお世辞を言い、作者の家で作品について熱弁をふるう輩は嫌いだ。そんなことをするのは育ちが悪い証拠だ。さらに、そういった連中はほどなく、オペラで『湖上の美人』を見たことがあるだけで、自分が話していることについて何も知らないということが明らかになるのだ。[32]

セント・キャサリン通りの検事総長の家で食事をした。メルヴィル卿夫妻、最高法院次長、サコスのサー・アーチボルド・キャンベルもいた。みんな同級生で40年来の知り合いだ。最高法院次長以外はみんな、ハイスクールでフレイザーのクラスだった。ボイルは大学で一緒になった。他にも、サー・アダム・ファーガソン、コリン・マッケンジー、ジェイムズ・ホープ、ジェイムズ・バカン、クロード・ラッセル、そして多分もう二、三人同期がいる。

しかし、

彼らは大きな渦の中をあちこち泳ぎ回っているようだ。［ウェルギリウス『アエネーイス』、第1歌118行］

24日（木） 外国人と言えば、ロンドンには4、5年前から、初めはライオンだが、2年ほどたつと姿を変えて、やがてイノシシになってしまう動物がいる。ウーゴ・フォスコーロという名前の、マリーの店や文学者の集まりによく顔を出している男がいる。ヒヒのように醜く、耐えられないくらいうぬぼれが強く、早口でまくし立て、怒鳴り声を上げて議論をするが、良識のある人間が道理を説く分別もわきまえておらず、喉を切られる豚のようにずっと金切り声を上げている。

もう一人そのような動物として、バイロンについて何か書いた、シシリア人のサルヴォ侯爵がいる。[33] 彼は2日間アボッツフォードに泊まったが、昼までどう過ごしたら良いのか分からず、諺を当てる遊びなどつまらないことをして女性たちを困らせた。

違った種類の外国人もいる。オロニム（オロニンだと思うが）伯爵は王立協会会長の息子で、近衛連隊の隊長だ。身分が卑しく病弱そうに見えるが、分別があり、率直で、いろんなことをよく知っている。

若きダヴィドウ伯爵が個人教師のコリアー氏と共にアボッツフォードに来ていたし、今も勉強のためにエディンバラに滞在している。彼はあの有名なオルロフの甥だ。16歳という若さで、大いに分別があり健全な考え方をしているのに、いささかもうぬぼれたり出しゃばったりすることがないのは、本当に驚くべきことだ。それどころか、とても優しく、控え目で、頭が良さそうに見える。それでも、ロシアの状況について尋ねると、倍の年齢の人間のように、正確かつ的確に答えた。彼はまだ16歳だ。

歳よりもませていて利口なのは、長生きはしないと言う。［シェイクスピア『リチャード三世』、3幕1場］

彼の場合、この言葉が本当になったら残念に思うだろう。アボッツフォードではミス・デュメルグの友人で、私が気に入っている二人のフランス人に会った。そのうちの一人のルノアールは悲劇を書いたが、ちゃんと礼儀をわきまえており、それを引き合いに出したりしない。[34]　私も悪意のある人にそそのかされたけれども、その作品に言及することはなかった。初め彼らはやたらとお世辞を言おうとしたが、この家ではそんなことをする習慣はないと言って聞かせると、よく分かったようで、感じのよい態度になった。

この半年ほどで初めて、今朝少し胆汁症の発作があった。ロンドンでの問題が私の胃につかえているわけではない。事態は良くなっており、私にとっても他の人にとっても良い結果になりそうだからだ。

ロバート・コックバーンと食事をした。メルヴィル卿一家、サー・ジョン・ホープ夫妻、ロバート・カー卿夫妻なども同席した。炭坑夫全員が団結して石炭の値段を倍にしている。彼らは週に 30 から 40 シリング稼ぐことができるにもかかわらず、と言うよりも、稼げるので、働こうとしないのだ。ロバート・カー卿は、（アイルランドのグラナード伯爵の息子の）フォーブズ卿からの手紙について話した。それによると、自宅で寝ている時に息苦しくなって目を覚ましたフォーブズは、体を動かす力は失ってしまったが、意識はあったので、家が燃えているということは分かった。まさに部屋が炎に包まれようとした時、彼が飼っている大きな犬がベッドに飛び乗って、シャツをくわえて階段のところまで引っ張って行ったので、新鮮な空気を吸った彼は力を取り戻して逃げることができた。この話は犬に命を救われたほとんどの例と大いに異なっている。たいていの場合、犬は力と技を発揮できる水の中に飛び込む。火の中に飛び込むのは、人間にとっても犬にとっても嫌なことだ。

25 日（金）　職人たちの団結についてジェフリーが書いた、要領を得た善意の演説を読んだ。[35]　この文章は役に立つのだろうか――うーむ。火をつけるにはリリパットのこびとの手で十分だが、それを消すにはガリヴァーのおしっこの力が必要になるだろう。ホイッグたちは間違った考えを抱き続けるだろう。つまり、この世は小冊子や演説によって統制されており、ある行動方針が人々

の利益に最もかなったものだということを十分に証明することができるならば、その問題についてちょっと演説をしただけで、人々は最後には当然その行動方針を採用するということを証明したことになるという考え方である。このような場合には、法律も教会も必要なくなるだろう。と言うのは、人間にとって最も利益になる、道徳的にきちんとした、しっかりとした習慣を提供するのは難しいことではなく、悪徳は罪ではなく愚行だということは確かだからである。しかし、こういった人間はそれぞれ情熱や偏見を抱いており、それを満足させるために、一般の幸福のみならず、個人としての自分の幸福を優先するのである。こういった片意地な衝動に駆られて、あす飢え死にするのが分かっているのに、今日は酒を飲む――水曜日には絞首刑になるのが分かっているのに、あす人を殺す。人は自分を支配する感情を抑える力をなかなか信じることができないので、職人たちは値段をつり上げるために一週間団結するが、永遠に製造することができなくなるのだ。最も良い解決策は、他の職業から労働者を補うことであるように思われる。ジェフリーは、職人はそれぞれ本業以外に何かもう一つ学んで、弓に二本の弦を用意しておくべきだと言っている。彼は年季奉公の期間が倍になるのを考慮に入れていない。人を織工としても仕立屋としても優れた職人にするには、家長が二人の妻に仕えるのと同じくらいの時間が必要だが、結局のところ、そういった人間はどちらの技術も身に付けることはないだろう。実際には、職人なら誰でもできる仕事がもう一つある。穴を掘ったり、畑仕事をしたりすることができるからだ。おそらく様々な組合を解体する最も良い理由は、彼らが愚かにも怠け者を養うために勤勉な者たちから徴収した金を使っているということになるだろう。病人や年寄り、未亡人や孤児のための蓄えが、製造業者が商品を売ってどんなに利益を得ても支払うことができないほどの賃金を得るために、これまでどれくらい使われてきたことか。

きのうの夜家に帰る途中転んでしまった。アソル通りの東の端に、まだ完成していない家が何軒かあり、そこら辺にある資材を避けるために、通りを横切って行った。月明かりにだまされて、泥の海の中に（ありがたいことに正真正銘の泥と水だった）足首まではまって、転んで手をついてしまった。ピラモスとティスベーの壁にそっくりの姿になってしまった。本当に激しく投げ出された

のだ。家に帰ってみると、幸いにも妻はもう床に就いていたので、諫められたりお悔やみを言われたりすることもなく、湯に浸かって体を洗った。コックバーンの温かいもてなしは私が転んだことで利益を得て有名になるだろうが、それに対して私は何も要求することはできない。しかし、これからは夜外出する時は馬車に乗らなければならないだろう。自由が制限されるが、受け容れなければならない。

注記：この優雅で不名誉な振る舞いを記録してから8週間もたたないうちに、私は馬車を持つことができなくなっていた。

ロバート・キャデルから、ロンドンの状況についての楽観的な手紙が来ていた。彼らの取引先は彼の勢力下に入っている。3日前なら、泥の中で転ぶよりも高くつく、ジュディーが言うところの「慰め」を喜んで買っていただろう——と言うのも、あの偉大なコンスタブルが倒れたなら、

> ああ、わが同胞諸君、私もどうと倒れただろう！［シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』、3幕2場］

クウツ夫人がセント・オールバンズ公爵とシャーロット・ボークラーク夫人と共に別れの挨拶に来た。[36] アボッツフォードでは、公爵の求婚はうまくいかなかった。思うに、彼女は私に嘘偽りなくすべてを打ち明けてくれた。彼女は二度きっぱりと彼の求婚を断り、今は単なる友人のような間柄である。私は恋愛関係に近いのではないかと主張した。彼女は公爵と結婚してもいいと言ったが、今のところはそのつもりはないのだ。彼女がこのように素直に認めているのは、結婚の可能性を完全に否定するよりも、公爵にとって好都合なことなのだろうか。クウツ夫人のパーティーに出て、彼女の悪口を言うのがはやっている。常日頃私は、彼女は親切で愛想の良い女性だと思っている。富をひけらかすことはあるが、気取ったり傲慢な態度を見せたりすることはなく、やり方さえ分かれば喜んで人のためになろうとする。舞台女優だった頃のことをためらわず話している時には、人を楽しませることもできる。あれだけの富を持っていると、ある程度見栄を張ることになるが、それがどうしたと言うのか。彼女

と結婚したなら、きっと公爵は莫大な財産が得られる。公爵と結婚したなら、彼女は高い地位を得る。公爵が 20 歳年上の女性と結婚することになるとするなら、彼女の方は 20 ほど知性に劣る男と結婚することになる。彼は彼女の財産を浪費することはないと思う――彼は物静かで優しい人のようだ。彼女は彼の優しさにつけ込むことはないと思う――温和な気質や心にはという意味だが――歳の差は本人たち以外には関わりのないことだ――だから、二人が互いに同意するなら、私は結婚に賛成する。ちょうどこれを書いている時に、セント・オールバンズ卿とシャーロット夫人が来て、クウツ夫人に説教の本を薦めてくれようにと言った――私を信用してくれて大いに感謝する――私はローガンの説教集を薦めた[37]――詩人はいつでも互いに代弁し合うべきだ――私の任務は、善良なクウツ夫人の方が身分の高い貴族の求婚者よりも権威があるということを、ちょっとひけらかすことだと思う。「生き生きと、活発で陽気で」あり続けるなら、彼女は彼に身を捧げることになり、私がさっき言った結婚への同意を撤回することはないだろう。

妻と娘と静かに食事をした。

ロバート・キャデルが仕事のことで夕方ちょっと顔を見せた。ここで私は節約を実行する決意を書き留めておく。節約する以外に仕方がないのだ。何とか維持できるのはアボッツフォードだけであり、それも財産としては大きすぎるので、以下のような決心をした。

もうこれ以上増築はしない。

景気が完全に落ち着くまでは、これ以上土地を買わない。

本や高価なガラクタを買わない――ある程度はという意味だが。

そして、今年の仕事の報酬で、土地を抵当に借りた金を清算する。

このような決意をし、健康な体と勤勉さがあれば、「雷が鳴っていても眠る」ことができるだろう［シェイクスピア『マクベス』、4 幕 1 場］。

結局のところ、やくざなユダヤ人の株式仲買人たちが、今ロンドンで起こっているように、自分たちの目的のために信用不安を引き起こして、ハースト・ロビンソン社のような会社の資金を取引している人たちの信用を脅かすというのは耐え難いことだ。自分たちが引き起こした混乱に乗じて安全に強奪できる

ように、騒ぎを起こして正直者を殴り倒して金品を奪う掏摸の集団のようだ。

26日（土） 法廷は遅くに始まり、1時まで続いた。そのあと、ブラのジェイムズ・ステュアート氏の込み入った問題に関わっていて、4時まで足止めを食った。この若者はオークニーの年収1000ポンド以上の地所を相続することになっている。母親は若くして結婚し、最初の一年のうちに妻になり母になり未亡人になった。不運なことに、いい加減な仕事をする、おそらく誠意に欠ける代理人に指示されて、不幸なことに彼女は、この人物との金銭上の取引のために困窮していた。私は息子の後見人の一人になって、彼らの問題を処理する仕事を託された――少なくとも私は、勤勉さに欠けるために失敗することはないだろう。私は彼女に、1000ポンドで買い、そのうちの600ポンドは既に抵当に入っているニューウィントンの家を二重の（したがって、不確かな）抵当物件として、300ポンド貸した。同情心の他には私とこの家族を結び付けるものはないし、ひょっとすると、この若者が成人した時には、感謝されることもないかも知れない。父が骨を折ってやった人たちによくそんな仕打ちをされていたのを覚えている。しかし、良いことをしようとする時には、何か危険を冒さなかったなら、それにどんな価値があるというのか。だから、できればこのオークニーの領主を助けたい。注記：私は自分自身の災難のためにこの仕事を諦めざるを得なくなった。

家に帰って妻とアンと静かに食事をした。

27日（日） しばらく前にジョン・マリーが私の義理の息子のジョン・G・ロックハートと契約を結んで、十分な報酬を支払うという条件で、『クォータリー・レヴュー』の運営と編集を任せることになった。[38] 才能の点でも人格の点でも、彼ほどぴったりの人物は見付からないことは確かだ。バローや何人かの老獪な人物は、[39] ロックハートの諷刺好きな性格と、ブラックウッドの雑誌に掲載された常軌を逸した意見に彼が同意したと思われていることに不安を抱いており、若きディズレイリがスコットランドまでやって来て、反対意見を取り除くために、ロンドンの私の友人たちに働きかけるようにロックハートに頼

むことになったそうだ。[40] 私は誰彼構わず、義理の息子が人を中傷する愚かで軽率な若者ではないと言うつもりはない。6、7年前にちょっとした諷刺をしたことがあるのは確かだ。私はヒーバーとサウジーには手紙を書いた[41]――ヒーバーへの手紙では、（この世で最も臆病な本屋とバイロンが言った）マリーをぎょっとさせた報告と、もし適切だと思うならバローに見せてもよい手紙について書いた――サウジーにはもっと漠然と、息子が編集長になったことを知らせ、彼の資質について書いた。それと同時に、息子は『ブラックウッド・マガジン』とは全く無関係であり、サウジーとワーズワスが感情を害して近所に住む変人が書いたと思っている、ふざけた文章を書いたのは彼ではないと伝えた。私は10月まではこの一件のことは聞いていなかった。サウジーは8月には湖水地方にいたので、この一件を知っていたはずで、私がキャニングとエリスに働きかけて、編集長のコールリッジ氏を辞めさせて、義理の息子をその地位に就けたと思われたくはない。[42] 実際に、私はこの提案を聞いた時とても驚いたのだ。そのような提案が初めてされたのは、キャニングがボウルトン大佐の家でロックハートの考え方についてアンに探りを入れていた時だと思う。彼は私にはその件について何もほのめかさなかった。ロックハートにとって非常に有利に働く他の見方も示されている。彼らの目的を知っているのは一人（チャールトンのジョン・ケイ[43]）だけであり、本当に私はそれが他の誰にも打ち明けられていなければと思う。昨日、私がやや強い調子で書いた手紙に対するマリーからの返事を受け取った。一人か二人の寄稿者がいわれもなくロックハートは編集長としては軽率過ぎると思っているという理由だけで、息子がその地位と職に就くのを諦めたなら、マリーは人の道にはずれたことをすることになると言ってやったのだ。薬が効いたようだ。マリーの手紙には、すべてうまく行っており、ディズレイリはロックハートではなく私の所に来るはずであり、私は二通だけ内密の手紙を書くだけでよく、マリーが怯えているというたわごとを言う者はいなくなったと書いてあった。その手紙にはバローの書き込みと署名があって、万事順調で、ジョンがその職に就くのは簡単なことであり、喜ばしいことだと言っている。私はきっと彼がうまくやって行くだろうと、少しも心配していない。彼には才能を発揮するにふさわしい場所がない

だけだ。それでも、彼はつまらない敵は軽蔑できるようにしなければならない。狩りに長けた者は、何か特別な目的でもなければ、カラスなど撃つべきではない。『クォータリー』でハズリットやハントのような者たちに注目すると、彼らの存在に気付いていない世間に彼らのことを知らせることになるだろう。何年も前に私が創刊に関わったこの雑誌が、その後大いに成功を収め、今「最もふさわしい者に与えよ」という最も立派な考え方に基づいて、私の義理の息子が運営することになったというのは、何とも不思議なことだ。しかし、家庭での楽しみに関しては悲しむべき点もある。今日は日曜日で、いつもなら息子夫婦は私たちと一緒に食事をし、たいていは友人が一人か二人同席したものだ。しかし、今では彼らが来ることはない――彼らの小さな家がアボッツフォードからさほど遠からぬ所にあった田舎に帰ったなら、一緒に食事ができないのをもっと寂しく思うだろう。私たちはいつもチーフスウッドまで散歩をしたり、馬や馬車で出かけたりしていたからだ。ロックハートは家族をとても大事にしており、妻子を愛しているので、すべてうまく行くと思う。

夕方ロックハートから手紙があった。ロンドンではみんなに快く受け入れられたとのことだ。前任者の若きコールリッジは、男らしく紳士的な態度で、寄稿者として力を貸そうと申し出ている、といったことが書いてあった。

28日（月） ソファイアは如才なく良識のある娘だと思うので、今回のロンドンへの転居の結果について不安を感じることはないし、さほど心配していない。あの娘は礼儀作法をわきまえているし、うわべを飾ることはない。音楽の才能に欠けているのがよく分かっているので、人前で場所柄もわきまえず演奏したりしない――これはまれに見る美徳だ――その上、自尊心もあるので、街でも田舎でも、ジャッカルと呼んでもいいような女性の誰かに、簡単に罠にはめられて寵愛を受けることはないだろう。さらに、家庭を大事にしており、遊び歩いたりすることもない。それから、あの娘は締まり屋のようだから、3000ポンドあれば、おとなしく暮らせば少しは貯金もできるだろう。ロックハートは、長所が世間に知られ、蓄えた知識を発揮する場があれば、きっとみんなに好かれるだろう。しかし、立派な外見と顔立ちをしているけれど、ロンドンの

社交界でうまくやって行けるかどうか分からない。時々彼はあの諺の逆を行って、「沈んだ顔をして、思っていることを隠さず表す」――つまり、そこにいるみんなに注意を向けないで、誰か一人と懇ろになって、隅っこに行って、他の者たちを冷やかしているように見えるのだ。これは、若い頃人とあまり付き合わないで、ずっと大学で暮らしていたせいだ。しかし、世間で起こっていることには何でも関心を持つことで、評判も良くなり、賞賛されるようになるのだ。賢い人間はそうすることが自分のためになると思って、愚かな者たちと付き合っている時でも、情報や新たな人生観を手に入れるのだ。何かの役割を演じることができないなら、人と付き合うべきではない。皮肉な性格に加えて、このように人と打ち解けず、スペインのけちな貴族のような態度をしているために、この世で最も気立ての良い男の評判は、エディンバラではあまり良くない。ロンドンではすべての人に気に入られるかどうかは重要ではない。と言うのも、天才としての評判を確立することができたとしても、「変人」と言われるだけだからだ。

本当におかしなことを頼んでくる者がいる。給料以上の生活をしている、私が知らないオックスフォードやケンブリッジの卒業生が、20 ポンドか 50 ポンド、あるいは 100 ポンド貸してくれと言ってくる。デンマーク海軍の大佐が手紙をよこして、生活が困窮しているので金を出してくれと言ってきた。その金でコロンビアに渡って、私が気前よく与えたのを夢に見た地域を解放する手助けをすべく尽力するとのことだ。その男には、それは逆夢になると言ってやることができる。ジョウゼフ・サーフィスのように、人が良すぎるのも考えものだと思うようになった。[44]　どうして私がそれほどまでに気前が良いと思われるようになったのか分からないが、パフが言うように「神によって富を与えられし者たち」の一人だと思われているためだと思う。[45]　私に無心する者たちよ、私は気前の良い人間でもなければ、金持ちでもない。そういった意見が間違っているのはありがたいことだと思うことができるのであるが。

雪が降りしきる中をメルヴィル卿の屋敷まで行って食事をした。幸せだった日々とつながりのある場所にまた行くことができて嬉しかった。サー・R・ダンダスと、今ではアバクロンビー卿となった旧友のジョージに会った。[46]

ジョージは奥さんと美しい娘を連れて来ていた。彼は昔と変わらず本当に愛想が良かった。私たちの話は常ならず楽しいもので、昔ふざけ合ったことや昔の友人のことを思い出して、興味深いものとなった。ジョージは本当に昔のままで、自分の意見を曲げることはないが、反論として言われることすべてに言葉では同意しているのがおもしろかった。いつもジョージは柳のようだった。吹き付ける意見の風に逆らうことはないが、どんなに風が吹こうとも、しっかりと根を下ろした意見を変えることはないのだ。

大げさに言うと、この変わった癖はとても芝居がかったものに見えるかも知れない。いつでも相手の意見に同意しているように見えるけれど、自分の意見は決して変えることはなく、しかも、相手をだますつもりなど全くないように見える人の良さでこんなことをしている人間を想像してみろ。そのような人間は、相手に反駁する手間を省いてやりたいと思っているだけなのだ。

29日（火） サウジーから手紙があった。マリーが何の相談もなく『クォータリー』の編集長を変えたことに不満を抱いており、ロックハートの昔の警句についてのどこかの老婆の無駄話を引き合いに出しているが、親切なことに、結局は私と娘に敬意を払って、あの雑誌から手を引くつもりはないと言っている。サウジーがあの雑誌に忠義を尽くしてきたのは確かだ――彼の並外れた才能、広範囲に渡る読書量、いつも変わらぬ勤勉さ、そして、初めはそれ程でもなかったが、今では人望があるということは、非常に尊重すべきことであり、彼が手を引いたら大きな損失になるだろう。それに応えて、私はサウジーに本当のことを指摘することはできなかった。つまり、彼はトーリーであり、高教会派としての偏見を抱いているので、今の時代の精神に関わる事柄について相談するのは危険だと思ったということは。そこで私は、事実だと確信していることだけを指摘した。つまり、マリーはサウジーの機嫌を損ねるのを恐れて、臆病さのあまり手紙を書くことができなかったのであり、サウジーを軽視するつもりはなかったということを。私はマリーが老婆のように心配性で用心深いということや、友人や敵についていろいろと噂話をしているといったことについて述べたが、一回か二回すばらしい雑誌を出せば、

そういったことに対する十分な答えとなるだろう。そして私は、引き続き支援してくれるというサウジーの提案を、然るべき感謝の言葉を添えて受け容れた。私は彼が手を引くのを恐れているわけではない――ロックハートは彼には苦労させられるだろう。サウジーは優れた才能の持ち主であるが、それを一般受けするように発揮する技術がないからだ。彼はよく散漫な書き方をして、しばしば細々としたつまらない事実や役に立たない難解な知識を重視する。優れた才能と優れた気質故に偶像化される狭い世界でもっぱら暮らしているので、彼は強い偏見を抱くようになっている。それは全く高潔で立派なものではあるのだが。熱心に高教会派としての主張をしているが、それで世間を攻撃してもうまく行かないだろう。ギフォードはサウジーの論説をかなり刈り込んでおり、時には改竄している形跡もある。[47] サウジーはギフォードが肉の一番いい部分を切り取ってしまったと言っている。ロックハートがナイフを使うようになったら、サウジー博士もこれまでのようにおとなしくしていないのではないかと思う。今に分かるだろう。私はサウジーの手紙をロックハートに見せるつもりはない。彼に対して親しげな調子で書かれていないので、スペインのけちな貴族のプライドを傷付けそうだからだ。二人が仲良くしてくれればと思う。私の評判を最も過小評価している者たちでさえ、もし私がこの雑誌から手を引いたら、そのことから生じる損失を大げさに考えているとサウジーが言っているのも、いかにももっともなことである。こういった反目すべての原因になっているのは、名指しされてはいないが、『ブラックウッド・マガジン』だ。湖畔詩人たちの間で時々燃え上がった火種の原因は、すべてロックハートにあるとされている。今彼は勇気と思慮分別を尽くして努力しなければならない――彼には良き後ろ楯がいる。キャニング、ブルームフィールド主教、ギフォード、ライト、クローカー、ウィル・ローズ、それにダグラスもいる。すばらしい企てであり、優れた友人たちがいて、準備万端整っている。これは私が企てたことではないのは確かだ。それでも、初めはライトにほのめかされ、そのあとロックハートへのマリーからの正式の提案があるまでは、この一件についてひとことも聞いていなかったにもかかわらず、私がこの計画を立てたと言ったり考えたりする者がいるだろう。私はキャニングとチャール

ズ・エリスが主にこの計画を動かしていると思っている。もうこれ以上この件で頭を悩ませないことにしよう。

最高法院次長宅で会食。民事控訴院長官やスモレット大佐などがいた。エディンバラの部隊の総司令官サー・ロバート・オキャラハン閣下は、リスモア伯爵の兄で、勲章や記章をいくつも付けた、いかにも軍人らしい男だ。[48] 彼の弟にはこの前ローザー邸で会ったが、感じが良くて、その名に値する人物だった。彼は自分で曲を作って、自分が書いた詩を歌うが、ひどいアイルランド訛りのせいで、とてもユーモラスだ。訛りはアイルランドの料理に豊かな味を添えるソースのようなものだ。おしゃれな人だが気に障るほどではなく、祖国の名誉を重んじる熱い気持ちを抱いているが、それは上流社会の人間のつまらない自分本位の穏やかさとはかなり違っている。

30日（水） 私に「窓から眺める者の目がかすむ時が来た」[「コヘレトへの言葉」、12章3節]。この冬までは時折めがねの助けを借りるだけで何とかしのいできたが、今では読んだり書いたりする時にはいつもめがねを掛けなければならない。体は良くなることはないが、足が悪いことが時には苦痛になり、しばしば不便に思われる。[49] 石畳の道や舗道は厄介で、国会議事堂からカースル・ストリートまで歩いて帰っただけでほっとする。（ブラクシー老人がある時言ったように、[50] 十分に時間を掛ければ）田舎では5マイルか6マイルくらい楽しく歩けるのだが。まあいいか――こういったことはいずれ起こることであり、陽気で素直な態度で受け容れなければならない。幼い頃に足が悪くなったことを考えるなら、体に障害のある人間が、私のように健康で活動的で、しかも2、30年間動き回っていたというのは、考えられないことだ。縫い目はほころびて肘が出て来ると、あの仕立屋も言っている[51]――この8月15日で54歳になったのだから、私のこの世での衣服は新しいものではない。ウォルターもチャールズもロックハートも、見ての通り活発で立派な若者であり、健康な体で動き回るのを楽しんでいるが、私にそれが欠けているとは言えまい。多分私はこういった資質にあまりにも価値を置き過ぎていたのだと思う。しかし、高尚で独立心に富んだ心は、いつもそうであるとは限らないが、当然なが

ら体の強さと結び付くように思われる。強健な人間はたいてい愛想が良く、活動的な人間はしばしば体と同じく心のしなやかさを示すものだ。それでも、こういった優れた性質は間違った使い方をされることが多い。しかし、こういったことについても、神は私たちを裁きの座に連れて行かれるのだ［「コヘレトへの言葉」、11 章 9 節］。

何ヶ月か前から私は他の文学者と共に、ラガンの G 夫人への年金の請願書の署名を集めている。[52] 私たちの考えでは、年金は著述家としての彼女の仕事に当然払われるべき敬意であり、私が思うに、度重なる不幸な出来事に耐えてきた彼女の心の強さとしなやかさ故に、なおさら敬意が払われるべきである。不幸なことに、年金に使うことができる金は 100 ポンドしかなく、この金を大臣たちは G 夫人と財産を没収されたスコットランドの貴族の孫娘である貧しい婦人に均等に振り分けた。ハイランドの女性らしく誇り高く、詩人らしく虚栄心が強く、インテリ女性らしく愚かな G 夫人は、この分配の仕方には悪意があると考えて、自分の功績についてメルヴィル卿に手紙を書いて、友人たちは自分の権利が正当に評価されていないと考えているので、年金は国王に返してほしいという要求をした。そこで今度はメルヴィル卿が少し腹を立てて、G 夫人は 50 ポンド受け取るつもりなのかどうか知るために、その手紙をそのまま私に送ってきた。道理をわきまえない女性の相手をするのは嫌なので、私は女心を知るために、あの陽気な感情の人の本を手に取った。[53] その結果、彼女をメルヴィル卿と仲直りさせる仕事を引き受けることにした。どんな結末になるかについては、疑いの余地はない。人を軽蔑している犬でさえも汚れたプディングを食べるからだ。つまるところ、あのかわいそうな夫人は大いに哀れむべき人だ。ただ一人残った彼女の娘は、体がすっかり弱ってしまって、精神に異常を来している。

おじが亡くなってから初めて招かれて、いとこのロバート・ラザフォードと食事をした。アッシュスティールに住む、いとこのラッセル中佐が妹のアンを連れて来ていたが、彼は最近インドから帰国したばかりだ。いかにも軍人らしい立派な男で、騎兵隊の将校として名前を知られている。陸路インドから戻って来たので、見聞も広い。ローガンの綴り方ではガチョウの L の L 将軍、サー・

ウィリアム・ハミルトン、ミス・ペギー・スウィントン、ウィリアム・キースなどもいた。キースの兄は体調がすぐれず、この親戚の集まりに出席することができなかった。

＊　スコットランドの詩人・小説家ウォルター・スコット（1771-1832）は、1825年11月20日から日記をつけ始めている。これはスコットが54歳の時のことであり、その後何度か短期間の中断はあるものの、1832年9月に亡くなる前の同年4月頃まで、この日記は書き続けられている。

晩年に当たるこの6年余りの間に、スコットは様々な苦難を経験している。1825年に起こった金融危機によって、翌年1月には、スコットの作品を出版していたコンスタブル社と、彼が共同経営者となっていたジェイムズ・バランタインの印刷所が倒産する。その結果彼は多額の借金を背負うことになる。それに追い打ちをかけるように、5月には妻のシャーロットが亡くなる。さらには、長年患っていた胆石が悪化し、のちには脳卒中の発作にも見舞われる。こういった悲劇的状況の中で書かれた日記は、スコットの人柄や人生観を直接知ることができる貴重な資料となっている。

日記の冒頭の部分で述べられているように、スコットはこの日記が将来公開されるのを意識していたことは確かである。そのため、その日に起こったことだけでなく、過去の出来事や人物についての思い出も書き綴られている。また、他の作品と同じように、シェイクスピアの劇など、様々な文学作品からの引用や言及も見られ、単なる身辺雑記ではなく、自伝的文学作品の様相を呈している。

特に、日記が書き始められる前年に亡くなったバイロンについての回想を初めとして、サウジー、ヘンリー・マッケンジー、シェリー、キーツ、ワーズワスといった当時の文学者との交友関係も描かれており、この日記は文学史的にも大いに価値があると思われる。また、法律家でもあったスコットは、スコットランドの高等裁判所に当たる民事訴訟院の書記官を務めていた。そのため彼は、当時の政治家や法律家、貴族や実業家などと親密な関係にあった。日記でもそういった人物との交流が描かれており、当

時の社会や政治の状況を知ることができる。

本稿では、*The Journal of Sir Walter Scott*（ed. W. E. K. Anderson, Edinburgh: Canongate Books, 1998）をテクストとして使用した。以下の注では、重要な人物や文学作品などについて、アンダーソンによる注釈やロックハートの伝記などを参照して、説明を加えた。なお、文学作品や聖書からの引用、言及については、本文中の［　　］内に出典を記した。

注

1 スコットは日記にみずから注釈を加えており、中にはのちになって欄外に書き込まれたと思われるものもある。本稿では、本文中に挿入する形で訳出した。

2 John Gibson Lockhart（1794-1854）は、スコットの長女 Sofia（1799-1837）の夫で、のちにスコットの伝記 *Memoirs of the Life of Sir Walter Scott*（1837-38）を書く。Anne（1803-33）は次女。

3 7 月から 8 月にかけてのこの旅は、2 月に Jane Jobson と結婚したばかりで、軍人としてダブリンに赴任していた長男 Walter（1801-47）を訪問するために行われた。ロックハートとアンも同行し、スコットは小説家 Maria Edgeworth（1767-1849）の家も訪れている。

4 William Clerk（1771-1847）の父 John Clerk（1728-1812）が書いた *An Essay on Naval Tactics*（1790）は、トラファルガー海戦でのネルソンの戦術に影響を与えたと言われている。

5 Charles Kirkpatrick Sharpe（1781-1851）はスコットランドの好古家で古書編集者。スコットが編纂した *The Minstrelsy of the Scottish Border*（1802-3）にバラッドを提供している。

6 シャープは James Kirkton（1628-99）の *Secret and True History of the Church of Scotland from the Restoration to the year 1678* を編集し、1817 年に出版している。

7 Robert Douglas, *Peerage of Scotland*, 1813.

8 ミス・ホーキンズによる説明とは、小説家 Laetitia Matilda Hawkins（1759-1835）の *Anecdotes, Biographical Sketches, and Memoirs*（1822）のことと思われる。Horace Walpole（1717-97）は、英国の初代首相となった政治家 Robert Walpole（1676-1745）の息子で、ゴシック小説 *The Castle of Otranto*（1764）の著者。

9 スコットの同僚の裁判所書記官 Hector Macdonald Buchanan の娘 Jemima のこと。

10 アイルランド人の愛称。アイルランドの守護聖人 Saint Patrick にちなむ。

11 スコットは 1823 年に設立された Edinburgh Oil Gas Company の社長を務めていた。スコットが国境地方に建てたアボッツフォードの邸宅は、スコットランドで最初にガス灯による照明が導入された家の一つであった。ヴァージニア・ウルフは ‘Gas at Abbotsford’（1940）というエッセイを書いている。

12 Sir Robert Dundas of Beechwood（1761-1836）は、スコットと同じく民事控訴院書記で、スコット家と家族ぐるみの付き合いをしていた。そのため、次の文では「（職務上の）姪たち」と書かれている。第二代メルヴィル子爵 Robert Saunders Dundas（1772-1851）はスコットの学校時代からの友人。

13 Sir Joshua Reynolds（1723-92）は肖像画家で、Royal Academy 初代院長。

14 Thomas Moor（1779-1852）はアイルランドの詩人。ここで言及されているバイロンの伝記は 1830 年に出版され、スコットへの献辞が付されている。

15 Matthew Lewis（1775-1818）はゴシック小説 *The Monk*（1796）の作者。スコットは 1798 年に初めてルイスに会い、1801 年には彼の *Tales of Wonder* に翻訳やバッラドを寄稿している。
16 Henry, third Duke of Buccleuch（1746-1812）.
17 James Boswell（1740-95）の *The Life of Samuel Johnson*（1791）の中の逸話。ジェイムズ・ボズウェル『サミュエル・ジョンソン伝』（中野好之訳、みすず書房、1983）、第 3 巻、p.228 参照。
18 John Cam Hobhouse（1786-1869）は、バイロンの友人で、彼と共に旅をした。バイロンの死後、彼の作品の管理者となった。
19 エディンバラの劇場でスコットの小説 *The Abbot*（1820）のオペラが上演されていた時に、ムーアと共に見に行った時の逸話。7 月の旅行の際には、スコットはダブリンの劇場で観客に熱狂的な歓迎を受けている。
20 Archibald Constable（1774-1827）は、エディンバラの出版業者。スコットの小説のほとんどが彼の出版社から出されていた。James Ballantyne（1772-1833）はスコットの幼なじみで、スコットが出資して設立された彼の印刷所が、コンスタブル社のためにスコットの作品を印刷していた。
21 初めスコットはジェイムズの弟 John Ballantyne（1774-1821）との共同経営という形で出版社を作ったが、この会社は 1813 年から翌年にかけて何度か経営危機に直面し、最終的には倒産した。
22 出版社の信用回復のために、スコットは当時執筆していた小説 *The Woodstock* を 1 月 25 日までに出版するという広告を出すことに同意している。実際には、この小説が出版されたのは 4 月になってからであった。
23 Sir John Sinclair of Ulbster（1754-1835）はハイランドの地主で、スコットは日記の他の箇所でも、彼の厚かましさに不快感を表している。
24 Alexander Adam（1741-1809）の *Roman Antiquities*（1791）。アダムはスコットが通っていたハイスクールの校長であった。
25 戦闘用の鉄かぶと（head piece）と歩兵用のかぶとのモリオン（morion）は、シンクレアの鈍感さに対する皮肉として使っているものと思われる。
26 Henry Fielding の戯曲 *The Tragedy of Tragedies: or, The Life and Death of Tom Thumb the Great*（1731）の 1 幕 5 場への言及。原作では ‘He made the giants first, and then kill’d them.’ となっている。
27 William Stewart Rose（1775-1843）は詩人で、アリオストの翻訳者。
28 John Murray（1778-1843）は、1813 年までコンスタブル社のロンドンでの代理人を務めていた。スコットをバイロンに紹介したのは彼であった。後述の『クォータリー・レヴュー』はマリーの出版社から刊行されている。
29 1822 年創刊の季刊誌 *Liberal* は 4 号で廃刊。創刊号にバイロンの *The Vision of Judgment* が掲載されたことで知られている。
30 William John Bankes（1786-1855）は探検家で、国会議員も務めた。ケンブリッジ大学でバイロンと共に学び、生涯の友となり、大陸への旅に何度か同行した。
31 Robert Cadell（1788-1849）はコンスタブルの共同経営者。コンスタブルの破産後、スコットはキャデルとの関係を深めることになる。
32 *Lady of the Lake*（1810）はスコットの物語詩で最も有名な作品で、オペラとして何度も上演されている。
33 *Lord Byron en Italie at en Grèce*（1825）の著者、サルヴォ侯爵 Carlo のこと。
34 悲劇 *Marie Stuart*（1820）と *Le Cid d’Andalousie*（1825）の作者 Pierre Lebrun のこと。スコットは他の箇所でもこの人物の名前を間違えて、ルノアールと書いている。

35 Francis Jeffrey（1773-1850）は、『エディンバラ・レヴュー』の編集者で、ホイッグ党の弁護士。ここで言及されている小冊子は、*Combinations of Workmen*（1825）。
36 Coutts 夫人は元女優で、銀行家 Thomas Coutts の未亡人。このあと彼女は、1827 年にセント・オールバンズ公爵（Duke of St. Albans）と結婚することになる。Charlotte Beauclerk 夫人は公爵の妹。
37 John Logan（1748-88）は、ジョン・シンクレアの個人教師であり、のちに South Leith 教会の聖職者となった。1781 年に詩集を出し、説教集は死後出版された。
38 スコットは 1809 年創刊のこの雑誌に深く関わっていた。ロックハートは編集長として年に 1250 から 1500 ポンドの報酬を約束されている。
39 John Barrow（1764-1848）は探検家、地理学者で、この当時海軍大臣を務めていた。『クォータリー・レヴュー』に 200 以上の論説を寄稿している。
40 Benjamin Disraeli（1804-81）は当時 21 歳であった。1837 年に国会議員となり、1868 年には首相となる。
41 Richard Heber（1771-1833）は、古書収集家であり、国会議員。1800 年にコンスタブルの店でスコットに出会い、*The Minstrelsy of the Scottish Border* 編纂の手助けをした。Robert Southey（1774-1843）は湖畔詩人の一人で、『クォータリー・レヴュー』の主要な寄稿者の一人。1813 年に桂冠詩人に推挙されたスコットは、それを辞退し、サウジーにその座を譲っている。
42 George Canning（1770-1827）はスコットの友人の政治家で、『クォータリー・レヴュー』の創刊に関わった。1827 年に亡くなる直前に首相になった。Charles Ellis（1771-1845）はスコットの友人 George Ellis（1753-1815）のいとこで、国会議員。John Taylor Coleridge（1790-1876）は、詩人 Samuel Taylor Coleridge（1772-1834）の甥で、1824 年から『クォータリー・レヴュー』の編集長を務めていた。
43 John Cay（1790-1865）は、ノーサンバランド州 Charlton の出身で、当時はスコットランドの Linlithgow 州の長官を務めていた。
44 Richard Sheridan（1751-1816）の *School for Scandal*（1777）の登場人物 Joseph Surface の台詞（2 幕 2 場）。
45 Sheridan の *Critic*（1799）の Puff の台詞（1 幕 2 場）。
46 George Abercromby（1770-1843）は、メルヴィル卿 Sir Richard Dundas の妹の夫。
47 William Gifford（1756-1826）は、創刊時から 1824 年まで『クォータリー・レヴュー』の編集長を務めていた。
48 Robert William O'Callaghan（1770-1840）、陸軍少将。
49 スコットは一歳半の時に小児麻痺にかかり、足が不自由になった。
50 ブラクシー老人（old Braxie）とは、Robert MacQueen, Lord Braxfield（1722-99）のこと。弁護士として活躍し、のちに最高法院次長となる。
51 1771 年初演の劇 *The Maid of Bath* の作者 Samuel Foote（1720-1777）のこと。
52 ハイランドの教区 Laggan の聖職者 James Grant の未亡人 Anne Grant（1775-1838）。*Letters from the Mountains*、*Superstitions of the Highlands*、*Memoirs of a Highland Lady* などを書いた。
53 Henry Mackenzie（1745-1831）の小説 *The Man of Feeling*（1771）のこと。